

総括的にみると *E. coli* が39%で最も多く、次いで *Proteus* 22%、*ブ*菌13%等となっているが、治療別に観察すると、特有のパターンをしめすのがわかる。慢性症のものについて、菌の推移をみると、菌固定の見られるものは *E. coli*, *Prot. Kleb.* が多いが一時的に出現するものでは *Prot. Kleb.* *ブ*菌等が可也高頻度に表われている。

Ⅱ) 耐性菌について

一般にKM, FD, 以外の抗生剤には耐性菌が非常に多いが、これも患者の病気や治療によつて特長を有し、又尿路感染症起炎菌の耐性菌のほとんどは薬剤尿中濃度の5倍以上という強い耐性を獲得しており、CP. について便中よりの分離菌を比較した場合も、尿中菌では強い耐性を認めた。次に多重耐性については5~6剤耐性のものが多く、これも治療法別によつて特長を持っている。

Ⅲ) 治療について

ウロサイダル, コサテトラシン, レダキン, カナマイシン等の臨床効果, 感受性テストと臨床効果の比較, 更にいわゆる尿路消毒剤の抗菌力等について述べたい。

27. 癌のリンパ節転移防止に対する副腎皮質ステロイドの応用

(金沢大)

赤須 文男, 館野 政也, 浅妻 茂美,
本間 遵

副腎皮質ステロイドの投与によつて動物のリンパ節が退縮することはすでに知られている。

我々は未だ癌浸潤のないリンパ節への癌の転移を防止するために、そのリンパ節を退縮させることが効果的ではないかとの観点にたつて *Corticosteroids* で十分に前処置したラットに腹水肝癌AH 130を移植し、その移植率、腹水貯溜量・リンパ節への癌浸潤の状態を検したところ、癌の移植率は未処置群に比して処置群は著るしく低下し、更に腹水量も著明に減少し、そのような例ではリンパ節の萎縮が著明でしかも、萎縮したリンパ節には癌の転移が認められないことを知った。このようなリンパ節の萎縮は合成副腎皮質ステロイドの投与によつても認められた。このさい、リンパ節の萎縮は胸腺の萎縮や流血中リンパ球数の減少とほぼ平行することも認められた。更に我々は退縮したリンパ節に癌転移の起りにくいことを解明するための1つの手段として無処置群のリン

パ節と *Corticosteroids* 処置群のリンパ節の核酸含有量特にDNA量。RNA量を Schmidt & Thannhauser 法で測定した。その結果リンパ節の核酸含有量は、*Cortisone* 処置によりDNA量の減少が惹起されるのを認めたのに対し、RNA量は大略不変であり、RNA/DNA比も、RNA-³²P/DNA-³²P 比もともに上昇するのを認めた。これらの事実から我々はDNA量の減少は癌のリンパ節転移防止に何らかの役割を果しているのではないかと考え、尚、実験をつづけられている。更に我々は癌患者に於ける *Lymphangiography* に於てこれを観察中である。

28. 子宮全剔除手術後の頸部 Unsuspected carcinoma の検討

(国立金沢)

遠藤 幸三, 森越 進, 竹内 桂一,
大下 陸郎

良性疾患の診断の下に手術摘除した材料に術前にその存在を疑わなかつた癌を偶然発見した場合にこれを *Unsuspected carcinoma* という。子宮摘除手術に際して脛上部切断術で頸部を残留すると、将来断端癌発生の可能性を残し、また時に癌が潜伏することがある。我々は1953年以来、脛上部切断術を廃止し単純全摘を常用している(第8回総会報告)が、1963年9月までに単純全摘2508、脛上部切断29例(1.14%)の症例を経験している。頸癌以外のこれらの全摘2508例の内、術後の頸部組織検索で31例(1.24%)の癌を発見している。このほとんど全例は微小の癌で現在の診断規準によつて組織学的に再検討を加えて期別を決定した所、上皮内癌17例(0.68%)、初期浸潤癌(Ia期)14例(0.56%)であつた。後者の内10例は上皮内癌に近い微小の浸潤を示すもので他の4例も増殖の深さは5mmを超えていない。また占居部位はほぼ全例頸管内に限局する。10例は5年治癒し、他のものも根治したものと推定されている。

これらの蔓延度から考えて、可視癌として症状を発するのにも少くとも数年、大多数は10年内外を要するものと推察される。従つて脛上部切断後10年以内に起る頸癌は手術時既に微癌を蔵していたという可能性が高い。全31例中22例に術前 *Smear test* または生検が行われているに拘わらず発見を免れたのは採取法、鏡検能力の欠陥も指摘されたが、癌のひろがりや微小であるため今後においても *Unsuspected Ca.* の絶無を期することは困難と思われる。